シャルル・ボネの有機体論

飯　野　和　夫

I

Le hasard seul a jeté en moi une perception immense, incommensurable, qui a le caractère le plus évident de la vérité. [...] cette perception, c'est celle du système de la création tout entière avec son commencement et son but. Les sages de l'Inde, et après eux Pythagore, Charles Bonnet et Kant, qui sont les trois plus grands génies de tous les siècles, en ont aperçu quelque chose [...].

(Charles Nodier, Corresp., 22 juillet 1832).[1]

ジュネーヴの博物学者であり哲学的著作を残したCharles Bonnet (1720–1793) はこうして19世紀初頭の一個のロマン的な精神にとってはカントと並ぶ大思想家であった。今日顧みられること少ないとはいえ，ボネは18世紀後半から19世紀初頭にかけてかなり広く読まれ評価されていたと思われる[2]。

その思想は様々な傾向の折衷の上に成り，扱う対象も多岐にわたるが，便宜的にいくつかの分野に分ければ次のように見ることができよう。① 有機体論及び自然理論 ② いわゆる転生論 ③ 感覚論に基づく観念学 ④ 形而上学的考察，道徳論など。小論では①有機体論を中心に据えて，派生する「生物変移説」transformisme とともに検討し，次いでボネの名とともに有名な②転生論にもふれることでボネによって生物界の歴史がいかに考えられていたかを見ることとしたい。しかしボネの思想の実体がほとんど知られていない事情を考えると，あらかじめ最小限の紹介をしておくことも必要と思われる。以下，上の便宜的区分に従って簡略にボネの思想の広がりを示すこととしたい。

ボネはまず第一に，博物学者として『有機体論考』(*Considération sur les Corps organisés*, 1762),『自然の観照』(*Contemplation de la Nature*, 1764)などの著作を残し，18世紀中葉にあってプロの研究者として認められていた。実地研究においても20歳の若さでアリマキの単為生殖を観察によって確証し，これによってボネは今日も科学史にその名を残している。しかし彼はこれらの観察によって目を痛め，その後の研究の中心は理論的分野に移ることになり，それが今掲げた著作として結実するのである。

この分野での理論的研究の中心をなすものは有機体論であり，小論のテーマとして改めて考察するが，この有機体論は有機体の発生についての解釈によって基礎づけられている。ボネの発生論はまず「胚種先在説」théorie de la préexistence des germes あるいは「予先形成説（前成説）」préformationnisme ou préformisme として特徴づけることができる。この説を採るボネによれば，有機組織を持つ動植物のすべての個体は，天地創造の際に，微小な有機体である胚（胚種）germe として神によって一斉に作られたのであり，いわゆる発生 génération とは，以来微小なまま存続して来た有機体が成長して可視的なものとなることである（*Consid.*, I, 15)[3]。

そしてその先在する胚は動物の場合雌の胎内で卵子の形を取るとされ，ボネは「卵生説」ovisme と呼ばれる立場に立つ（*ibid.*, I, 16)[4]。このような見解が採られるについてはボネ自身のアリマキの単為生殖の発見も重要な契機となり，20歳の頃にはボネはこの胚種先在説を確信していた。先在胚種が発生までどのような状態にあるかについては見解に変遷が見られるが，結局代々の胚は（雌の胚において）順次「入れこ」構造をなしているとされ，「入れこ説」théorie de l'emboîtement des germes の立場が表明されるに至る（*Tableau*, 71)[5]。

この胚種先在説自体は17世紀以来のものであり，細かな違いはあるにせよマールブランシュ，ライプニッツもそこに数えることができ，18世紀にあっても一般的な説で決して珍しいものではない。ただボネは18世紀中葉におけるこの説の主たる唱導者であり，後に見るようにその理論は胚種先在説の一つの到達点を示すものとなるのである。

他方，敬虔なプロテスタントであったボネにとって人間の精神（霊魂, âme）の実在は宗教的確信でもあったが，それはまた物質の複合性に対する感覚 sentiment の一性によっても導かれるものであった（*E.A.* §1）[6]。そしてボネは人間からの類推によって動物についてはポリプに至るまで非物質的実体としての精神を認める（*Consid.*, II, 76; *Tableau.*, 69; *Paling.*, 115）[7]。こうした類推の裏には，諸存在が連続的な階梯をなしているとする，当時かなり広まっていた「存在の連鎖」の観念も関与していると思われる[8]。そしてボネはこうした精神一般も胚種とともに太初より，いわばタブラ・ラーサとして潜勢的に存していると考えた（*Consid.*, II, 82-83; *Tableau*, 70; *Princ. philo.*, ch. 5）[9]。ところで「存在の連鎖」の観念に忠実であれば，この階梯中の植物以下の存在にも精神を認めるべきことになろう。しかし精神を持つことで可能となる感覚の明瞭な表徴を持たない植物以下の存在については，ボネは結局精神を持つことを疑っている。また有機的組織については，ボネは植物以上にはこれを認めるが，鉱物については否定している（*Contempl.*, 28）[10]。

さてボネは第二に，上の有機体論の基礎の上に，精神を持つ個体の死後の運命について考察した。いわゆる転生論である。ただしここで「転生」と訳した palingénésie の語はボネによってその原義，つまり「新生」ないし「再生」の意味で用いられている。小論では通例に準じて「転生」の訳を採るが，その内容は「輪廻」transmigration, métempsychose の事態と混同されてはならない。そしてボネにあって転生とは結局，人間についてはキリスト教の説く死後の「身体の蘇り」résurrection du corps を指し，また動物についても類似的な事態を想定するものに外ならない。

実際転生論においてはキリスト教思想が内容を大きく規定し，それは結局キリスト教の教え，特にその終末論の哲学的解釈の試みと言うことができる。終末論の解釈である以上当然のことながら，転生論はボネの道徳論の成立する場を提供するものであり，ボネの哲学の細部へ進むためには前提として把握しておかなければならないものである。またここでボネは自己の理論を構築するに当たって，ライプニッツの内に自己の強力な支持者を見出して行くことにな

る。

転生論がまとめて展開されるのは『哲学的転生論』(*Palingénésie philosophique,* 1769) においてであるが，その骨子は早くから獲得されていた。関連する記述は『心理学試論』(*Essai de Psychologie,* 1754),『精神能力分析論』(*Essai analytique sur les Facultés de l'Ame,* 1760),『自然の観照』などにおいても見出すことができる。

ボネは第三に感覚論に基づく観念学を構想し，『心理学試論』及び『精神能力分析論』の二作を残している。ボネは人間及び動物に精神実体を認めたが，精神と物体の直接作用を認め[11]，感覚論の立場を採った。その上でボネは人間について，感覚観念から抽象観念が形成される過程を考察した。ここでボネはロックの流れをくみ，コンディヤックとほぼ同格の位置を占める。

ボネはまた能動的な精神実体にあっても，その記憶，思考等の具体的作用は脳の組織に媒介されて実現されるとするなど，一般にその観念学を脳や感覚器官の生理学的考察と大胆に結びつけようとした。この態度は続く「観念学派」Idéologues に通じるものを持っていたと思われる。

ボネはさらに，まとまった著作とはしなかったものの，彼の思想全般を基礎づける形而上学的考察，さらには道徳論を残している。これらは，すでに転生論や観念学に関連して掲げた著作中に見られるほか，ボネの晩年に刊行された『博物学・哲学著作集』(*Œurres d'Histoire naturelle et de Philosophie* 8 vol. in-4; 18 vol. in-8, 1779-1783) に≪Ecrits divers≫として収められた小品などにも見ることができる。

これらの領域でボネはライプニッツ哲学の影響下にある。形而上学に関連しては，ボネがライプニッツに従って，現にある世界は可能的世界の内で最もよいものであるとする最善観 optimisme を受け入れていることを指摘しておきたい。1755年にフィロポリス Philopolis の名で書かれた，ルソーの『人間不平等起源論』を批判した有名な手紙にも，この最善観がはっきり反映しているのを見ることができる。

以上筆者はボネの思想がどれほどの幅を持つものであるかを示した。ボネの思想全体の基礎をなすものは有機体論であり，転生論もこの有機体論を基礎として初めて考えられるものである。小論ではまずこの有機体論を，主として『有機体論考』に即して検討することとしたい。

II 有　機　体

ボネが発生論として胚種先在説を採用したことはすでにふれた。ボネは当時の様々な実験，観察の成果をこの説のために援用するが，他の信奉者にとってと同様ボネにとっても，この説は本来哲学的に推定されたものであった。ボネにおける主要な論拠は，一個の有機体が自然の過程において機械的に形成されることが不可能と思われることである。『有機体論考』冒頭でボネは語っている。

> La Philosophie ayant compris l'impossibilité où elle étoit d'expliquer méchaniquement la Formation des Etres Organisés, a imaginé heureusement qu'ils existoient déjà en petit, sous la Forme de *Germes,* ou de *Corpuscules Organiques.* (*Consid.,* I,)[12]

何げない表現だが，有機体を機械的に形成されるものとして「説明」することが当時の自然科学において不可能であることが，直ちに自然過程での形成の否定につながってしまっている。そして新たな仮説たる胚種先在説は，実際にはボネにとって一仮説たる以上のものになってしまう。勿論ここには当時知られた力学法則に準じた機械論的[13]自然観では自然界で有機体が形成されるとするには不十分であった事情がかかわっている。しかし人間の認識を信頼してあくまで理解，説明が可能なもののみを認めていこうとする合理的態度はまた，認識の可能性から自然界を限定してしまい直ちに神を援用することにもつながったのである[14]。

さて，仮に今見たボネの論法を黙認して，有機的組織が物理的な自然過程で形成されえないとするとしても，そこから有機体があらかじめ先在していると

の結論が導かれるためには，いくつかの前提が承認されねばならないと考えられる。まずここでは，有機的組織が個別的な奇跡によって形成されることが暗黙の内に否定されていよう。一般にボネは自然の秩序への奇跡の介入を認めず，自然の内の事象に統一性，法則性を保たせようとした。これはすでに近世初頭以来の自然科学の要請であり，また，一般法則によって世界を律する神の完全性という形而上学的観念にも照応していたと思われる。他方，自然的には為されえないと考えられた奇跡に類する事態は，すべて普遍的奇跡たる神による天地創造の内に帰せられるのである。ボネはこうしてひとたび創造された世界については奇跡を否定して法則的解明を意図し，その限り当時の新しい思想傾向に与している[15]。

ボネはまた，有機体の形成を説明するために彼に先立つ時代に援用されることがあった「造型的本体」nature plastique といった非物質的原理にももはや頼らなかった（*Paling.*, 293)。いたずらにこうした認識不能の原理に訴えることは，今ふれた法則的解明の意図に，あるいはまた先に述べた人間の認識への信頼にも反することになろう。こうしてボネはまず奇跡や非物質的原理を退け，自然の法則の中に有機体を置いて考えようとしたのであった。

しかしながら他方ボネは，以上から進めて自然がその運動の中で自ら有機組織を生み出すとまでは考えなかった。ボネは物質分子[16]はその性質によって様々に区別されるとし，またニュートンの引力概念を選択的な親和力と解釈して導入し，自然界での物質分子相互の結合を考えるなどした（*Conisid.*, I, 63)。そしてボネは自然を律する法則にはいまだ知られないものがあることも認める。しかし未知の法則も当時までに知られた力学的運動法則から類推されるにとどまり，それらを質的に超えるものは想像しえなかった。それ故自律的に自己を維持し，合目的的に作用する有機体の本質的な構成は，自然界での一般法則に従った分子の結合のレヴェルを超えていると考えられたのである[17]。

当時モーペルテュイ(Maupertuis, 1698–1759), ビュッフォン(Buffon, 1707–1788)らは，現在の自然界では通常両親を模して子の有機体が形成されるとし，自然に有機体を再形成する力を認めて後成説（épigénèse）を新たな形の下に主張していた[18]。しかしボネは有機組織そのものについては，こうした再形成

の能力も自然に認めるには至らなかった。こうして結局すべての有機体は天地創造の際に一斉に，直接神によって作られたと考えられることになる。一般に胚種先在説とは自然の過程を力学的運動法則の秩序に切りつめた上で，その機械論的自然観を成立させる前提として，異質な神による創造を無媒介に援用するものであった[19),20)]。

以上から見て取れるように胚種先在説はその自然解釈において二面性を持っている。それは有機組織そのものの自然的な形成，再形成を認めるには至らず，この点で飛躍をなして神に訴えることになるが，すでに奇跡等の否定として見られたように，ひとたび創造された自然には内的な統一性，したがって自律性を認め，独立した価値を持つものとして自然を理解しようとした。胚種先在説はこの後者の面で大きくは新しい自然像に与していたと言いうるのである。

さてボネはこの先在胚種の基礎の上に，以後，有機体の活動の原理的機械論的解明を試みることになる。すでにふれたように，ボネはこの先在する有機体（胚）を雌の胎内の卵子に求め，また代々の胚は順次「入れこ」をなしていると考えた。この「入れこ」をなして先在する胚は「入れこ」をたどるほど微細なものとなるが，創造の時以来生命を保ち，いわゆる発生の以前にも少しずつ伸長を続けているとされる（*Mémoire sur les Germes, in Œuvres,* V）。さて胚はいわゆる発生に当たって本格的成長過程に入ることになるが，この本格的成長は，ボネによれば，いわゆる受精 fécondation の際にもたらされる雄の精液 liqueur séminale が胚を刺激しかつ栄養物となることで可能となる（*Consid.,* I, 15–16, 119; II, 229, 245）[21)]。

ところで一般に栄養摂取とは有機体が外部の物質分子を自己の組織に機械的に取り込んでゆく過程であるとされる（*ibid.,* I, 15）。そして先にふれた親和力によって各組織で必要とされる分子が選択されて取り込まれ，組織の繊維の網目を押し拡げることで伸長（成長）が起こると考えられる（*ibid.,* I, 6–8, 20–22, 63–70）。この際ボネは分子の「熱」chaleur（*ibid.,* 22）や「活動性」activité（*ibid.,* 15）の関与を認め，またそうしたものの消費と補給の必要につ

いても語っている（*ibid.*, 8, 70）。精液の液体部分を形成する物質分子は高度の活動性をもつと想定され，それ故胚の組織を飛躍的に伸長させることができるのだとされる（15-16）。こうして受精によって本格的成長を始めた胚は，その後母胎から栄養を供給されて成長を続け，いわゆる出生を迎える。かくて胚種先在説を採るボネにとっては，発生も有機体の本質に関わるものではない。それは有機体としての機能に関しては，すでにあるものに何ものも付け加えないのである。

Ⅲ　自　　然

ところでボネがこうした理論を確立した1760年頃には，この胚種先在説はすでにモーペルテュイ，ビュッフォンらによって批判されていた。とりわけ，胚種があらかじめ作られているならば遺伝の事実，つまり両親と子供の間の形質の類似をどう説明するのか，といった批判は重要であった。そしてこれらの論者は主としてこの点から後成説を主張し，両親双方からの分子が有機体を再構成する際，これらの分子はまた両親の特徴をも伝達するとしたのであった。ボネはこうした批判に対応しつつなお胚種先在説を擁護するが，そうすることで彼の理論はこの先在説の到達点を示すものとなるのである。

先在胚種はそれまで一般に，微小ながらすでに完成された一個の有機体として考えられていた。それに対してボネは，先在胚種がすでに完成されているとすれば遺伝をめぐる困難は免れえないと考え，胚はいまだ完成してはいないものと想定した。ボネによれば胚の成長は単に諸部分の拡大なのではなく，それ故胚は形態的にも成長後とかけ離れたものでもかまわない（*Tableau*, 67-68）。そしてこの胚は種 espèce と性別までが決定されているとされる（*Consid.*, I, 123, 154）。言葉を変えれば，天地創造の際にあらかじめ形成される胚は，種ごとの雌雄の有機的身体機能を保証する基盤であるに止まる。胚の予先形成は個体としての特徴まで含んでいる訳ではないのである。

こうしてボネは胚を従来より広く柔軟に解釈することとなり，胚は自然界での成長過程に大きな役割をゆずる。胚は自然界の内に位置を与えられ，外的自

然的影響を受容しつつ成長する中で初めて個体性を得るのである。

かくて先の遺伝の問題も胚の成長過程における変形とそれによる個体化として理解できる。つまり父親からは精液によって，母親からは子宮という環境として胚に影響が与えられ形質の伝達がなされるとされる。精液はその液体部分が胚の本格的成長のための最初の栄養物となるが，同時に父親の形質を液体の組成において受け継ぎ，子の胚に伝達する。すなわち精液は当該の種 espèce の有機体（身体）の各部位に適合する物質分子を含むように父親の生殖器官で精製される。そして父親の個体としての特殊性は，各種の分子の多寡や活動性の大小等として受け継がれるという（*Consid.*, II, 242-244)。栄養物として胚に取り込まれた精液の分子は，胚の適合する部位に結合して組織を伸長させるが，この適合する分子の多寡，活動性等によって胚の各部位は様々に変形されることになる。こうして父親の形質が子に伝達されると考えられたのである（*ibid.*, 245-246)[22]。

母親からの胚への影響はボネによって必ずしも明確にされてはいない[23]。しかし母胎から胚に供給される栄養物等が母親の身体的特殊性を帯びることで，母親の形質をある程度伝達することになると考えられる（*ibid.*, II, 257)[24]。

ボネはまた，以上見た遺伝以外に，地域，風土といったより一般的な要因の，胚が成長し個体化する過程での直接間接の影響も認めている。そして以上見てきた内容をまとめて次のように述べるのである。

Il ne faut pas croire que le Germe ait très en petit tous les traits qui caractérisent la Mère comme *Individu*. Le Germe porte l'empreinte originelle de l'Espèce, et non celle de l'Individualité. C'est très en petit un Homme, un Cheval, un Taureau, etc. mais, ce n'est pas un *certain* Homme, un *certain* Cheval, un *certain* Taureau, etc. Tous les Germes sont contemporains dans le Système de l'Evolution. Ils ne se sont pas communiqués les uns aux autres leurs traits, leurs caractères distinctifs. Je ne dis pas que tous ceux d'une même espèce soient parfaitement identiques. Je ne vois rien d'identique dans la Nature ; et sans recourir au principe des *Indiscernables* [de Leibniz], il est très clair, que tous les Germes d'une même espèce n'achèvent pas de se développer dans la même Matrice, dans le même tems, dans le même lieu,

dans le même climat, en un mot, dans les mêmes circonstances. Voilà bien des causes de variétés. Il en est d'autres plus efficaces encore ; ce sont les Liqueurs séminales. (*Consid.*, II, 256–7)

こうして個体的形質は決して本来の胚のレヴェルで与えられているのではなく，胚は自然界で成長する過程で個体としての形質を帯びる。ひるがえって考えると，自然はここで二次原因として作用して胚を個体化する新たな意義を獲得する。有機体は神が直接に作ったものであろうが，神は同時にすべての有機体を自然の時間的空間的秩序，事物の系列の中に置いた。この自然の秩序は法則にしたがって推移しているが，個々の存在はその中に位置を占めることで個体として実現されていく[25]。

ところで一つの種 espèce の各個体は順次様々な外的自然条件の下で成長する。そして長い時間の中でこれらの個体を順にたどっていけば，個体差にとどまらない種としての形質の変化も認めることができるのではないか。ボネは『有機体論考』の初期の稿ですでにこの問題に言及している。ただボネの表現には注意が必要である。彼は不適切にも，時間の中で「新しい種」が生み出される，という言い方をしているからである。

On ne peut douter que les Espèces qui existoient au commencement du Monde, ne fussent moins nombreuses que celles qui existent aujourdhui. La diversité, et la multitude des conjonctions ; peut-être même encore la diversité des climats et des nourritures, ont donné naissance à de nouvelles Espèces, ou à des Individus intermédiaires. Ces Individus s'étant unis à leur tour, les nuances se sont multipliées, et en se multipliant elles sont devenues moins sensibles. (*Consid.*, I, 122)

「新しい種」と「中間的な個体」が無造作に並べられていることからも，この「種」とは名目的なもの，各個体の形質の類似性から分類を行ったに時見出されるものだと考えられる。そしてボネによれば異種間の混血個体は不能（不妊）と考えられ，新しい混血の形質が維持されることはないから（*Consid.*, I, 45–46），ここではまた一つの種の内部での形質の多様化が語られているのだと思われる。

個体の発生・成長の過程で「交接」や「風土」の自然的要因の下に生じる変化は，さらに「数多くの交接」を経る中で新たな変容を蒙りながら順次子孫へと蓄積されると考えられる。この変化はまずいくつかの方向に蓄積され，一つの種の内に形態上の下位区分，つまり「新たな種」を形成するかもしれない。しかし次いでこれらの「亜種」相互で交接が行われる時には，さらに新しい中間形態が生み出され，一つの種の内に一層多様な傾向が生じることとなろう。ボネは上の引用に続けて語っている。

> Le *Poirier,* parmi les *Plantes,* la *Poule,* parmi les *Oiseaux,* le *Chien,* parmi les *Quadrupèdes,* nous fournissent des Exemples frappans de cette vérité. Et que n'aurions-nous point à dire à cet égard, des variétés qui s'observent parmi les Hommes, sortis originairement de deux Individus [Adam et Eve] !
> (*Consid.,* I, 122)

ただこれらの記述はすでにふれたように『有機体論考』の初期の稿に属し，この時期には個体的形質の遺伝はいまだ先に見たような具体的な説明を与えられず，それ故確実なものとはされていなかった。しかしボネはまた当時から子供と両親の形質の類似について，遺伝の観点からその原理の説明を試みてもいる (*Consid.,* I, 74)[26]。今見た一節に関連してこれ以上の展開がなされることはないが，この一節も個体の形質の遺伝を認めて初めて十分な意味を持ちうるのであり，ここでボネは暗黙の内にこうした遺伝を前提としていると考えられよう。

後期の稿でこの生物変移の問題が論じ直されることはないが，しかし遺伝作用からの具体的な説明が可能なところまでボネが到達していたことは明らかである。この生物変移の問題は当時モーペルテュイら後生論者によって論じられたが，ボネは遺伝の問題の解決を図るなかから，胚種先在説を維持しつつ生物変移を問題にしうるところまで到達したと言える。

ところで，こうしてボネに生物変移説 transformisme を認めるとしても，ボネは種ごとの胚の予先形成を主張しているのであり，種の固定性は自然の過程で破壊されるものではなく，したがって進化論と呼びうるものとはなりえないと思われる。ただボネによれば初期の稿から生物の具体的な形態や機能は自

然の中で決定されるとされ，したがって，種としての形態とその変化も外的自然的要因との関係で考えられる。正しくこの一点においてボネの有機体論は次代の思想を準備するものを持っていたと言えるであろう。胚種先在説を基礎としつつもともかくボネは，個体と種の形質を神の手から自然の手へとゆだね，それらを自然とともに推移するものとしたのである。そして他方，後成説が他の一般原理をもって有機組織の固有の意味を解消してしまったとも取れるのに対し，ボネは先在胚種という形においてではあれ，ともかくこの固有の意味に注目し続けたとも言えよう[27]。

Ⅳ　歴　　史

ところでボネはすでに「地域」，「風土」といった胚への一般的な影響要因を認めていた。今視点を地球全体に広げてその歴史をたどれば，地球上には自然条件の大規模な推移，変動も認められよう。こうしてボネは新たに，この一般的自然条件の変動に対応した生物の変移を語ることになる。この新たな視点からの変移説は『哲学的転生論』においていわゆる転生論とともに論じられるものである。しかしここにはこれまでの有機体論の緻密な展開に比べて飛躍が感じられることは認めねばならない。というのもここでは新たにキリスト教の教義との整合の要請，聖書の記述との整合の要請が表面に出ることになるからである[28]。

さて宇宙は時間とともにその内実を変化させているが，ボネによればその中で創造以来おそらくは数々の大変動 révolution が地球を襲ったものと考えられる。地球が大きな変貌をとげて来たことはすでに当時の自然学者たちが認めるところでもあった。ボネはここで，こうした大変動，つまり地球上の外的環境の決定的変化によって生物種の一層大きな形態変化がもたらされる，との仮説を提出する。同時にボネは旧約聖書で叙述される「創造」は実はこうした大変動の一つにすぎないのだとして，真の創造をアダムの時代よりはるか以前に押しやるのである。この視点からすると，前節で見たごとき生物変移はモーセの語る大変動以降の丨悳にすぎないこととなり，その変化も相対的に小さなも

のとなろう。この新たな視点からの生物変移についてボネは次のように語る。

Ces Révolutions multipliées auront modifié de plus en plus la forme et la structure primitives des Etres Organisés, comme elles auront changé de plus en plus la Structure extérieure et intérieure du Globe. [...] je me persuade facilement que si nous pouvions voir un Cheval, une Poule, un Serpent, sous leur premiere forme, sous la forme qu'ils avoient au temps de la Création, il nous seroit impossible de les reconnoître. La derniere révolution apportera, sans doute, de bien plus grands changements et au Globe lui-même et aux divers Etres qui l'habitent. (*Paling.*, 190)

この最後の一文については後にふれることとして，今は過去の生物変移に問題を限定しよう。地球の変動の中を，神の創造にかかわる本質的な種 espèce は実在し続ける（v. *Consid.*, I, 123)。しかしその具体的形態は自然の事物の系列の中で与えられ，この系列とともに推移するのである。ここではもはや個々の有機体のレヴェルでの考察がなされることもないが，ともかくも生物の形態を外的環境との関係でとらえ，自然に二次原因としての意味を持たせる視点は貫かれていると言える。

ボネはこの新たな変移説に関連して，モーセの大変動に前後する生物種の変遷のもようを推定している。しかしながらここで我々がボネの内に見出すものは，科学的態度と言うよりは，キリスト教の教義を受け入れつつ，それを自らの自然理論と整合するように解釈していこうとする姿に外ならない。先には自然に統一性を保たせるという要請に対して，胚種を予先形成する神が援用された。ここで聖書との整合という新たな要請から生じる一見困難な事態に対しても，結局すべてを予見する神が援用されることとなり，先在胚種は外界のあらゆる変動に適応しうるものとしてあらかじめ計算，設計されていたとされるのである（*Paling.*, 186)。

すなわちモーセの大変動にあっては一時的に地上のすべてが水に取り込まれ，太陽や星も隠されてしまうことで，外見的にモーセの叙述するごとき事態が現出する。しかしこの際有機体は，入れこをなした胚状態で（*ibid.*, 187）この変動を生き抜き，種 espèce を保存したとされる（*ibid.*, 188–189)。そしてさらに，自然界の諸原因一般が神によって準備された préparé(es) ことが認

められ（*ibid.*, 187），これまでボネの自然理論の対象となっていたすべてが神のもとに送り返される。そしてこの神はボネの統一的自然観に対応してもはや個別的な奇跡を行うことはなく，またアダムの時代に創造をなしたのでもないが，大きくはキリスト教の神に外ならないのである。

さてボネは今紹介したモーセの大変動の解釈に続けて，この大変動に続く我々の世界について，大変動直後の状態から次のように語っている。地球を襲った大変動の数は確定できないが，ここでは仮にモーセの語る大変動が唯一のものとされている。

> Ainsi, par une suite des Loix de la SAGESSE ETERNELLE tout reprend un nouvel Etre. Un autre Ordre de Choses succede au premier : le Monde est repeuplé et prend une nouvelle face : les Germes se développent : les Etres organisés retournent à la vie : le Règne organique commence une seconde période, et la fin de cette période sera celle du second Monde, de ce Monde dont l'Apôtre [Pierre] a dit, *qu'il est réservé pour le feu, et auquel succéderont de nouveaux Cieux et une nouvelle Terre.* (*Paling.*, 189)

モーセの大変動で始まった我々の時代も，ペテロの予言するごとく（ペテロの手紙，II, ch. III, 7, 13）やがて終わりを迎えることだろう。「新しい地」においては生物はいかなる形態を取ることになるのか。ボネはすでに前の引用の末尾で，来たるべき「最終的な大変動」によるさらに大きな生物の形態変化を暗示していたのだが。これについては次節でボネの転生論にふれることで明らかになろう。

*

*　*

以上筆者はボネの有機体論について，生物変移説にまで至る論理をたどった。我々はそこにまず，自然の内の事象に統一性，法則性を保たせ，自然を自律的なものととらえようとする自然科学の要請を見出しえた。そして自然の統一性を保ち，奇跡の頻繁な介入を排するために，自然は一般的運動法則によって推移するとされる一方，すべての有機体があらかじめ形成されているとの仮説が立てられ，これらが神に対して要求された。事実ボネにとって，神はこうした期待によく応えうる存在だったのである。

さてこの自然は創造時に事物の布置を与えられ，以後は神の叡知の具現として自律的法則的に推移しつつある。この自律的自然はその内部で相互に二次原因として働き，個々の有機体の具体的形質や，種の変移もそこから結果するのであった。ここで自然の自律性法則性の要請自体は，神が世界を統べる方式についての形而上学的な観念と照応していたと考えられる。その限りでは神がこの自然の推移を通して実現しようとする計画，摂理としての歴史はいまだ問題とならず，キリスト教のドグマが表面に出ることもない。統一的自然は神がもうけたものであっても，その法則自体は科学的接近を許すものであり，それ故ボネは，先在胚種を想定した後は，自然の原理的法則的解明を求める立場の積極的推進者となりえたのである。

しかしボネの内面においては，この一般的法則をもって世界を律する神は，とりもなおさずキリスト教の神でもあったのであり，それ故自然の原理的解明を目指す自己の一方の立場からキリスト教のドグマを解釈することが早晩問題となるのは当然だった。こうして教義が自然の統一性の内に解釈されることになるが，これは創世紀の解釈としてすでにその一端を見た。ここに至って，たとえば先在胚種の有機的機能は自然の秩序の起こりうる変動に対応しうるよう計算されていたとして（*Paling.*, 186），解釈上の困難は総じて神による事物の事前の配置によって説明されることになる。予定論 prédeterminisme がボネの思想の前面に出るのである。この事態は次にボネの転生論にふれることで一層明瞭となるであろう。そして小論ではまた，今見た変移説と転生論とを通じてボネにおける生物界の歴史の観念をさらに考えることとしたい。

V　転　　生

ボネのいわゆる転生論の細部に立ち入ることは小論の課題ではない[29]。ここでは小論冒頭での導入を受けて転生論の最小限の紹介をなし，統一的自然観の下でのキリスト教の教えの再解釈といった性格を考慮しつつ，ボネの歴史観を見る手がかりとしたい。

さて，人間等の個体の死後の運命を問題とする以上，転生論の出発点となる

のは死の解釈である。ボネにとって人間精神の不滅は自明のことであったが，彼はまた類推によって動物の精神一般を死後も不滅とした[30]。ところで動物が発生に先立って精神を宿した微小な胚として形成されているのならば，死後についても，動物は精神ある微小な有機体として我々の感覚をのがれて生き続ける，と考えることができよう。

こうして精神は発生前から死後に至るまで常に身体と結合しているとされ，個体の死後状態への移行の内にも何ら超自然的な事態は認められない。つまり自然の内のあらゆる事象を統一的にとらえようとする思考態度がここでも強引に適用される。感覚論者であるボネは，死後の精神が新たな観念を獲得し実際に機能していくためにも，生前同様，感覚及びそれをもたらす身体が必要と考えたのである。またボネは，この死後の微小な身体は現世的な身体の脳内ですでに脳の縮図として機能していると考えたが，これも精神作用に脳の生理学的構造が関与することを認める自らの理論を死後までそのまま維持せんがためであった[31]。以上，動物一般の精神の不滅が認められ，その上に自然の事象に統一性を得さしめようとしたこと，このことが転生論の以下の展開を大きく規定してゆくことになる。

さて，動物一般のこの脳内の微小な器官は「不滅胚種」germes imperissables などとも呼ばれ，エーテル性物質で合成され，あらかじめ将来の身体諸器官をも隠していると考えられる。そしてこの不滅胚種は，死によって通常の身体が分解した後には，当面は微小なまま自然界の物質中に散らばるのだとされる[32]。

ボネは次いで，この自然界に散らばった死後の微小な動物はやがて新たな成長をするだろうと語る。palingénésie と呼ばれる事態である。そして人間については，この成長はキリスト教が「身体の蘇り」として教えているものに外ならない。こうして以後，先の死の解釈を受けて，死後の状態についてのキリスト教の教えが，自然の連続的な運行の中で解釈し直されることになる。

さて，この成長がキリスト教の「復活」でもあるならば，それは「世の終わり」に起こることとなり，また「世の終わり」とはボネにとって地球を襲うであろう新たな大変動に他ならない。そしてこの「復活」の秩序には，人間のみならず動物一般のすべての個体が，不滅胚種の状態にあった創造以来のすべて

の個体が従うのだと考えられる。

Les causes qui opéreront cette révolution de notre Globe dont parle l'Apôtre, pourront opérer en même tems le développement plus ou moins accéléré de tous les Animaux concentrés dans ces Points organiques [...]. (*Paling.*, 126)

こうしてすべての個体の再成長が，宇宙の諸関係の中でこの地球の大変動とともに自然的に実現され，復活後の「来世」もボネによればこの宇宙の時間的未来であるにすぎないことになる。復活の秩序はもはや神の特別な介入，奇跡に俟つものではなく，不滅胚種は自然界の一定の状態に対応して再成長をなしうるように，あらかじめ神によって設計されているとされる（*Paling.*, 119, 123)。不滅胚種はその内に将来の自然的な復活の基礎を蔵している。先に地球の変動に対応しうる先在胚種の形成が語られたのと同様，ここでもすべてを予見する神が援用されることになるのである[33]。

ボネはこの後，いわば来世論として復活後の人間や動物の状態について推論する。人間も動物もこの「来世」において，現世では到達しえなかった段階へとおしなべて完全性を増しつつ，永遠の生を享受するであろうと神の善性から推論される[34]。そして人間については，そのエーテル性の身体は重さを持たないから，活動圏はもはや地球上には限られず，惑星界の宇宙空間も自由に飛翔できるだろうとされる。

しかし復活後の人間は本来はこの惑星界に住まうのではない。彼らは天使たちにまじって，惑星界を取りまき彼方へと広がる広大な「もう一つの宇宙」un autre univers に住まうことになろうとされる[35]。この空間はボネによってキリスト教の天国と同一視されている。しかし人間の新たな身体もエーテル性とはいえ現世界と共通の物質性を負っているのであり，その人間の住まうこの空間も惑星界と同質連続的なものと解せられる。つまりボネにとって「天国」は文字通り天に存する国であった[36]。

こうしてボネの転生論は，キリスト教の教義を自然の統一性の内に解釈しようとして（そこには動物一般に来世を認め，かつ来世で各個体が一様に完成へと向かうという他の論点も関与するが)，結果的に我々にはいかにも奇異に感じられる来世観に到達することとなるのである[37]。

＊
＊　＊

さてボネによれば，地球上に繁殖する生物種は過去に地球の大変動を介してその形態を変化させて来たとされた。我々はまた前節の最後で，地球の現在の秩序もやがてその周期を終え，その際「最終的な大変動」が地球上の諸存在に大きな変化をもたらすであろうとされたのを見た。この限りでは未来にもさらに生物変移が想定されているかにも見えよう。しかし事実はそうではない。すでに地球の現在の秩序の終極について使徒（ペテロ）の名が引かれていたことからも看取されるとおり，この予見される終極は，今転生論に即して見た，キリスト教の「終末」としての大変動に外ならないのである。

ボネは過去の大変動と将来の大変動を並べて語り（*Paling.*, 189–190），その相違を明言することはない。しかしこの両者を介して生起する事態は全く別のものである。過去については種の形態の変移が，未来については死後微小状態にある全個体の再成長，復活が規定されるのである[38]。ボネの『哲学的転生論』はその副題を「生物の過去と未来の状態についての考察」(Idées sur l'état passé et sur l'état futur des Etres vivants.）とするが，ここでも「過去の状態」と「未来の状態」は同じレヴェルにあるのではなく，それぞれ過去の種の変移と，未来の全個体の転生を指すのに外ならない。

こうして過去について問題とされた種の変移は，未来については個体の運命の問題にとって代わられる。未来に向けて個体の来世の問題へと観点は移行する[39]。未来についてはボネの内にはキリスト教の終末観 eschatologie があるのみである。そしてボネの歴史観，時間意識をその深部で規定しているものは，むしろこのキリスト教の終末観であるといってよい。

キリスト教の終末論とは歴史に終極を認め，そこに個体の永遠の来世の開始を見るものであろうが，この終末観はボネにおいて統一的自然像の内に解釈されることで新しい現実性を獲得している。つまり終末はもはや現実の宇宙の諸法則をくつがえすものではなく，個体の来世は現実の宇宙の同質的な時間の流れの内にはっきり位置を占めることになる。死後，時間の流れの片すみにいた個体は再び流れの中央に復し，歴史の終極に個体の来世が接続されて抵抗なく

一つの時間の流れを形づくる。こうして歴史の彼方に究極の価値を置く終末観が新たなリアリティを持って表明されたところに，ボネ及び彼を前後する一定数の人達の歴史意識の特徴があったのである。そこでの第一の関心は個体の運命であり，個体にとって自我の獲得によって始まった時間は終わりを持つことはない[40]。

Ⅵ　ノ　デ　ィ　エ

さて続く世代にボネは，我々がこれまで検討した人間及び諸動物の過去と未来についての理論，つまり『哲学的転生論』の内容をなす理論によって最も知られることになる。その理論は一般にロマン主義の土壌で評価，受容される[41]。そしてたとえばノディエ（Ch. Nodier, 1780-1844）の『人間転生論』（*De la Palingénésie humaine,* 1830）を読む時，事実我々は恐らくはライプニッツにも認められ，ボネを経て19世紀初頭のノディエらにまで至る，歴史観の一つのタイプを（そしてそれと結びついて宇宙観の一つのタイプをも）見出しうるのである。

ノディエはその『人間転生論』を地球上の生物の過去の歴史から説き起こす[42]。彼は物活論的な物質（352, 356）を神による宇宙の創造の最初に据え，以後はこの物質が「試行」essais（354）の中から自己を様々に変様させていくのだとした。生気を帯びた物質が長い歴史の中で鉱物，植物，動物と複雑化しながら，あらゆる種espèceを順に生み出していくことになる。動物において物質に付随する生気は感覚の形をとるに至るが，これはやがて思考にまで高められ，こうして人間がオランウータンの種から分岐して出現したとされる（360）[43]。

この進化の現在までの到達点である人間は思考する存在であるが，ノディエによれば人間はいまだ事物の本源の理解能力は持っていない（361-362）。そしてノディエは進化の延長上に，人間の次に来るべきものとして「理解存在」être compréhensif なるものを想定する（355）。

しかし我々はここで，ボネやライプニッツと同様，過去においては種を語りながら，未来については個体の来世が前面に出るという事態に直面する。つま

り人間から「理解存在」への「進化」の過程は，一人一人の人間の死後の変化であることになり，ノディエはこの「理解存在」をカトリックの言う煉獄において浄化されつつある人間に擬するのである（372-373)。

ノディエによれば動物までの個体は死において分解してしまうが，人間において獲得された思考能力は進化の一段階を画するもので（382)，âme（精神，霊魂）（360）を形作り，もはや分解することなく自己同一性を保つと考えられたように見える（375，382)。今後は「進化」とはとりもなおさず，この精神自体の個別の向上を意味することになるのである。

この理解存在は，一面では煉獄における人間になぞらえられるが，いまだ歴史上に出現してはおらず，将来しかるべき時に一斉に地球上に現われるとされる（375-376, 378)。この理解存在はまた，はっきり身体を持つとされる（382)。理解存在としての出現を待つ間の死後の人間個体についてはふれられないが，これまでの唯物論としての展開から，論理的には人間の思考能力（精神）が何らかの物質性を伴わずに存続するとは考えられない[44]。そしてこの理解存在としての人間はおしなべて徐々に自己を向上させていくものとされる。それは初めは現在の人間に似ているとされるが，ノディエはこの完成化の道の先に真の「復活状態」état résurrectionnel があるとし，この状態では身体は空気や光より微細なものになるとされ，ボネのエーテル性身体のイメージに接近するのである（380)。そしてこの『人間転生論』においては宇宙論点視点は明確ではないが，実はノディエもボネらと同様惑星界の彼方に被造物のついに赴くすみかを想定していたことが知られる。「復活状態」に達した人間も恐らくはこの栄光のすみかに住まうのである[45]。

以上のごときノディエの「進化論」を規定しているものが人間個体の来世への関心であることは明らかであろう。個体の運命を中心に未来を見ていく態度はボネらと共通のものである。そして恐らくは現実の宇宙の実在性が堅固なものと感じられ，人間の来世をこの堅固な現実の宇宙と統一的に見ようとしたために，ノディエは来世への移行を「進化」とみなしつつ現実の歴史に介入，接続させ，ボネらと同様，人間の来世を現実の宇宙の未来の事態としたのである[46]。

＊
＊　＊

ボネの有機体論から始めて，彼の歴史観を一瞥した小論は，その反映をさらにノディエに追って，ロマン主義の思想風土にまで至った。ボネにおいては，すでに彼の出発点である先在胚種の仮説において，神を援用して自然界に超越的な合目的性を認める思考態度と，自然に法則性を認め，作用原因による機械論的説明を求める思考態度の並存が認められた。ボネは先在胚種を形成する神を援用した後には，自然の統一的法則的な推移の過程の機械論的説明を試み，その中で遺伝現象なども対象化し，胚種先在説に立つ生物理論の到達点を示す。しかし自然に統一性を求める立場を採りつつキリスト教の教義をも解釈しようとし，ボネは一般に神がその目的にかなった秩序を世界に与えたとし，歴史の予定論的理解に至るのである。転生論も，キリスト教の終末論を自然の統一性，法則性の内に理解しようとした論理的帰結であった。

こうしてボネの内には，キリスト者と自然科学者，宗教的真理と機械論的方法，ロマン的精神と18世紀の「哲学者」が並存し，両者は無限なる神という観念の内に結合しえていた。そしてロマン的高揚と（擬似）科学的思考の結合は，19世紀にあってもボネの転生論と同様の思考を生んだ。ノディエにあっては，ボネの場合には超越的な自然界の合目的性を物質自体の内に内在化させようとする試みが見られるが，その歴史への観点，来世観はボネと符合する。バランシュの思想も二人から遠からぬ所に位置づけられよう。そして終末，来世のこうした「自然的」理解は，遡ってライプニッツの内にも認めることができるのであり，ボネはこの課題を正面から取り上げ，次代のロマン派の一定数の人々の世界観を準備した。ボネは地上的関心が強調される18世紀の語られることの少ない一面，宗教と科学の幸福な結合の一例を我々に示している。

注

1）A. Viatte の引用による。v. A. viatte, *Les Sources occultes du Romantisme*, Paris, 1929 (reprint, Champion), t. II, p. 165.

2）その著書はすべて独語訳が出，代表作の一つ『自然の観照』は5か国語に訳された。また晩年には大部の著作集も刊行された。ボネの思想の全般的影響については

次を参照のこと。R. Savioz, *La Philosophie de Charles Bonnet de Genève*, Vrin, 1948, 6e partie.

3) Bonnet, *Considérations sur les Corps organisés*（以下 *Consid.* と略），Amsterdam, 1762, 2 vol. t. I, p. 15. 以下小論での原著への指示は，書名を略記の上，ローマ数字で巻，アラビア数字でページを示すこととする。なお『有機体論考』の初めの8章（I, 1–123）は1748年から53年にかけて，それ以外は1758年以降に書かれている。以下ボネの見解に変遷が認められる場合は原則として後期の見解を取り上げることとする。

4) 先在胚種のありかについての胚種先在説中の一方の説。ただし胚生動物の卵子は，当時はまだ推定されたにとどまった。他方の説は，レーヴェンフークが発見した精虫に先在胚種を求める「精虫説（小動物説）」animalculisme であった。

5) Bonnet, *Tableau des Considérations sur les Corps organisés*（以下 *Tableau* と略），*in Œuvres d'Histoire naturelle et de Philosophie*（8 vol. in-4），Neuchâtel, 1783, t. VII, p. 71. この説は，先在胚種の発生までの状態についての胚種先在説中の一方の説。この「入れこ」構造は神の創造の無限性によって可能とされる。他方の説は「散種説」théorie de la dissémination des germes であり，この場合胚は自然界に散布されてあり，これが有機体の体内に取り込まれ，精虫または卵子の形を取るとされる。

6) Bonnet, *Essai analytique sur les Facultés de l'Ame,* 1760, § 1.

7) Bonnet, *Palingénésie philosophique*（以下 *Paling.* と略），*in Œuvres,* t. VII, p. 115.

8) cf. A. O. Lovejoy, *The Great Chain of Being,* Cambridge, Harvard U. P., 1942.

9) Bonnet, *Principes philosophiques sur la Cause première, in Essai de Psychologie,* Londre, 1755, ch. 15.

10) Bonnet, *Contemplation de la Nature, in Œuvres,* t. IV, p. 28.

11) ボネはいわゆる精神と物体の背後に一元的な「力」force を認め，それによってこの直接作用を説明しようともしている。cf, *Miditations sur l'origine des Sensations, in Œuvres*, t. Ⅷ.

12) 以下引用の綴りはいずれも原文のままとする。

13) 筆者は小論でこの「機械論」mécanism の語を「作用原因」cause éfficiente による自然世界の説明理論の意味で用いることとする。

14) ライプニッツもまた胚種先在説を採用したが，次のような一節にボネと同様の思考態度の反映も見出せよう。

> [. . .] la formation des corps organiques animés ne paroit explicable dans l'ordre de la nature, que lorsqu'on suppose une *preformation* déja organique [. . .]. (*Essais de Théodicés,* § 90)

15）ボネは動物一般に精神を認めたが，その精神も自然的には作られず，有機体(胚)とともに先在している，と考えられた。この精神の先在の根拠は，神による精神の個別的な創造，つまり個別的な奇跡を認めて神の意志と行為を継起的なものとすることの不合理性である（*Consid.*, II, 82)。有機体の形成について明言されていなかった個別的奇跡の否定が，ここでは形而上学的観点からはっきり表明されている。

16）ボネは自然界での物質の機能上の単位として一応分子 particule を認めるが，物質の究極的な組成については断定していない。

17）ボネは次のように語っている。

[. . .] Je leur demanderai [à mes Lecteurs] ensuite, s'ils conçoivent qu'un Tout [le Corps d'un Animal] aussi composé, aussi lié, aussi harmonique, puisse être formé par le simple concours de Molécules mues, ou dirigées, suivant certaines Loix à nous inconnuës. (*Consid.*, I, 98–99)

18）胚は両親の身体各部から抽出される雌雄の精液の混合から生み出されるとされ，この精液中の分子の特性によって有機組織の構成が伝達されると考えられた。

19）胚は神がその技巧によって自然の内に形作った精巧な機械であろう。それは神の叡知の一つの現れであった。

20）後成説との差はまず自然の自律的な運動の過程にどこまでを認めえたかの差であろう。ボネは自然の自律性の内に有機体の形成再形成にかかわる有機的，合目的的なものは認めえなかった。こうしてボネの自然の自律性は力学的なものにとどまったが，この自然観も，次節で見るように，有機体という基礎を得た上では有効なものとなろう。

21）ボネは精液の液体部分が重要なのだと考えた。精虫はボネにとっては精液中の奇生虫にすぎない（*Consid.*, I, 12–13, 116)。また受精は卵巣でなされると考えられた（*ibid.*, II, 243)。

22）精液の組成はまた，個体差の以前に種としての特質を示すと思われる。隣接する種の間の混血の問題はこれによって理解しえよう。ラバとは，牡ろばの種としての特質が精液の組成を介して馬の胚に伝達され，耳が伸びるなどの結果を生じたものとされる。なおボネは，混血の個体は不能（不妊）であるとの一般説を認め，胚の生殖器官は他の種の精液によっては，完全に適合する分子がないために機能が発達しないのだ，としている（*Consid.*, II, 246–247)。

23）雄の精液に類似した精液（生殖液）liqueur prolifique を雌にも認めうるなら，父親の影響と同様の説明がなしえようが，ボネはこの雌の精液の存在を疑問視している（*Consid.*, II, 257)。

24）ところでボネは精神自体の個別的差異を認めず，また能動的な精神にあっても，その具体的作用は脳の組織に媒介されて実現されるとした（v. *Paling.*, 137)。つまり精神的な特性はそれ自体問題とされえず，それを語ることはそのまま脳などの

生理的特性を語ることになる。また身体的内部感覚と密接に関連すると思われる情念の場合も同様であろう。それ故一度身体的生理的レヴェルでの遺伝を考えることで，それを介して精神的な特性や情念の遺伝を説明する道も開かれると思われる。

25）胚は自然界で外的要因を受容しつつ成長し，個体性を得る。同様のことは胚と結合した精神についても言えよう。ボネによれば精神実体は胚同様，個々の本来的差異を持たないが，前注で見たごとく，まず遺伝的に特性を与えられうる。感覚論者であるボネにとって，精神はまた初めはいわばタブラ・ラーサであって，外界から感覚器官を通じて感覚観念を受けとりつつ，それを契機として思考，抽象等の能力を発動する。それ故精神も外的諸関係の中で成長すると言うことができ（*Princ. philo.*, 346），それはまた精神の個別化の過程とも言える。一般にボネにあっては精神現象と外部の自然界にも因果関係が成立し，前者は後者との統一的連関にはいることでその原理的解明も可能となる。ボネは脳の組織の仮説を介して感覚観念に始まる精神現象の解明をも試みたが，これが彼の観念学である。

26）ボネはここで，雌雄双方に精液を認めることによる説明の可能性を示唆している。

27）筆者は別の機会に，転生論の場面におけるボネとライプニッツの思想的類似性を指摘した（「シャルル・ボネの転生論」日本フランス語フランス文学会『フランス語フランス文学研究』No. 39）。そして実はこの有機体論・変移説の場面でも両者の思想に類似性を認めることができるのである。ライプニッツは胚の入れこ構造を認めつつ，精虫説による胚種先在説を主張したが，彼もこの立場を守りつつ生物の変移を予感していたことが知られている。（v. Y. Belaval, *Leibniz, Initiation a sa philosophie*, Vrin, p. 203.）小論で立ち入ることはできないが，彼は『人間知性新論』の一節（IIIe partie, ch. VI, §23）で，神によって創造された胚に種の別があるとしても，胚は成長過程で母親の想像力などによって大きな様々な形態変化を蒙るとする。そして同一の種の中での形態の分化の可能性をも指摘し，ライオンやトラは元の猫の種の下位区分をなしているのではないかとしている。ボネと基本的に同様の論理展開と考えられる。ただしこの書は1765年まで未刊のままおかれ，ボネがここから直接影響されたとはできないと思われる。ライプニッツは一方ここで，混血種の存続も否定しきれないとしている。

28）一般にボネは神学上の定説からは比較的自由でいたと言える。まず統一的自然の要請からは，すでに教会と協調しえていた胚種の先在の外に，精神の先在が導かれた。ボネはまた「存在の連鎖」の観念を認め，そこから動物一般にも精神を認め，その先在と不滅をも結論する。こうした自由な思考態度は後に見る転生論の場面でも同様だが，ボネは聖書の記述はあくまでも尊重していたために，その解釈が要求されたのである。すでにボネは先の引用末尾で現在の人類がアダムとイヴから生じたことを認めていた。

29）ボネの転生論については，出典も含めて前掲拙論を参照のこと。そこで筆者はラ

イプニッツに同様の思想が認められることをも示した。

30）v. *Essai de psychologie*, ch. 85 ; *Paling.*, Avant-Propos, Part. I, pp. 115–120. この結果ボネは大胆にも動物の個体にも「来世」を認めて，神の恩寵にかかわらせることになる。ボネは植物が精神を持つことを疑問視もしているが，仮に持つとすれば以下動物について語られるところは，植物にも類比的に想定されるという。v. *Paling*,. Part.IV.

31）この脳の縮図の物理的痕跡として記憶が保存され，とりわけ人間の場合，精神の個別性が死後まで保たれる。

32）創造の初期に生まれそして死んだ個体はこの散布状態におかれて過去の何回かの大変動を経験したことになろう。

33）不滅胚種に宿る精神，とりわけ人間精神の感覚や意識が，死後どういう経過をたどるかボネは明確にはしないが，不滅胚種が微小なまま自然界に散らばる死後の最初の状態においても，感覚や意識は保たれるとの考えに傾いているように見える（*Œuvres*, VIII, 273）。そして不滅胚種が新たな成長をとげた段階で精神が意識を保持するのは明らかである。

34）小論では論点としえない，地獄の劫罰の否定，来世における諸存在の一般的進歩の思想である。

35）『哲学的転生論』には次のように見える。

[. . .] quel ne sera point le Bonheur dont ELLE [la BONTE INEFFABLE : Dieu] le comblera [l'Homme] dans la Jérusalem d'En-haut ! quelles ne seront point les beautés, la richesse et la variété du magnifique Spectacle qui s'offrira à ses regards dans la Maison de DIEU, dans cet autre Univers qui enceint tous les Orbes Planétaires et où l'ETRE EXISTANT PAR-SOI [Dieu] donne aux HIERARCHIES CELESTES les Signes les plus Augustes de SA PRESENCE ADORABLE ! (*Paling.*, 666)

36）ボネは来世の動物については，エーテル性身体を持つものの少くとも当面は地球にとどまり，人間が去った後の地球で完成化への道を歩みつつ新たな動物界の秩序を打ち立てるとしている。

37）以上ボネの転生論に対応する思想がライプニッツにも見出されるが，ここではボネと同様の天国観を示し，ボネも注目している総括的な一節を引くに止めたい。

D'ailleurs, comme il n'y a nulle raison qui porte à croire qu'il y a des étoiles par tout, ne se peut il point qu'il y ait un grand espace au delà de la region des étoiles ? Que ce soit le Ciel Empyrée, ou non, toujours cet espace immense, qui environne toute cette region, pourra être rempli de bonheur et de gloire. Il pourra être conçu comme l'Ocean, où se rendent les fleuves de toutes les creatures bien heureuses, quand elles seront venues à leur perfection dans le systeme des étoiles. (*Essais de Théodicée*, § 19)

38）過去においては雌の体内で入れこをなす先在胚種から新しい個体が順次成長し，こうして各個体の成長時の形態が，同一種にあっても，大変動によって分かたれる各時期に異った特徴を示す。将来の大変動においては，自然界に不滅胚種として散布されている創造以来のすべての個体が一斉に二度目の成長を経験するのである。

39）ボネはまた社会の未来といったものをほとんど問題にしない。

40）ライプニッツも，キリスト教の「世の終わり」を地球の変功として解釈し受け入れている（*Monadologie*, §88）が，表立ってではないにせよ，以上のような歴史観，時間概念を共有していたとも考えられよう。

41）ボネの広義の転生論は18世紀末にドイツでラーヴァター（J. K. Lavater, 1741–1801），ヤコービ（F. H. Jacobi, 1743–1819）などの共鳴を得，フランスでは19世紀にはいって神秘主義的傾向を持つ人達を中心に評判となる。ノディエ（Ch. Nodier, 1780–1844），バランシュ（P. S. Ballanche, 1776–1847）への影響は特に大きく，メーストル（J. de Maistre, 1753–1821）もこの思想に共鳴している。またバルザックも『人間喜劇』の総序などでボネの名を挙げている。

42）以下『人間転生論』への指示は Nodier, *De la Palingénésie humaine, in Œuvres complètes,* Paris, Renduel, 1832 (reprint, Slatkine), t. V. によりページ数のみを示す。

43）こうしてすべては唯物論として展開され，また地球上の生物の種の出現の歴史は，はっきり「進化」として把えられる。この点ではボネやライプニッツの時代との思想状況の差が感じられよう。が，この進化説も実は創世紀の象徴的解釈（万物創造の日々は地球上の尺度で計られたのではない）によってその基礎づけが試みられているのである。

44）妖精 fée は今まで見たノディエの説に直接当てはまるものではないが，彼がこの妖精に「限りなく透明な」身体を想定したと言われることも，あるいは参考になろう。cf. A. Viatte, *op. cit.*, t. II, 160.

45）『パン屑の妖精』（*La Fee aux Miettes,* 1832）の序には次のように見える。

> Il est incontestable que l'échelle des êtres se prolonge sans interruption à travers notre tourbillon [notre système planétaire] tout entier, et de notre tourbillon à tous les autres, jusqu'aux limites incompréhensibles de l'espace où réside l'être sans commencement et sans fin [Dieu], qui est la source inépuisable de toutes les existences et qui les ramène incessamment à lui. (*La Fée aux Miettes, in Oeuvres complètes,* IV, 28)

先に注35及び注37で紹介したボネやライプニッツの宇宙観，天国観との符号は明らかである。また想像力がより自由を得ている神秘小説『リディまたは復活』（*Lydie ou la resurrection,* 1839）においては，人間は死ぬと直ちにまず遠い惑星に移り住み，完成化への道を歩み始めるとされる。そしてリディだけは生きながらにして，夜眠りに入るとともに夫の待つこの星へ旅をする。そのメカニズムは示されな

いが，ボネのエーテル性不滅胚種の仮説を知っていたノディエにとって，これは単に絵空事ではなかったのではあるまいか。

46）バランシュの『社会転生論』(*Palingénésie sociale*, 1827–1829) は社会の転生，進歩を主題としている。しかしこの社会の未来への関心も恐らくは千年王国論的な関心の下にあるのであり，人間個人の来世，転生を排除するものではない。そしてこの転生は死後直ちに起こるとされるものの，死後の人間も物質的身体を持ち現実宇宙に属する点，転生が完成化への道であり，人間の安息の地が宇宙の彼方に想定される点で，小論でふれた著者たちと共通するのである。v. Ballanche, *Œuvres*, 1883, (reprint Slatkine), t. IV, 136, 138–139.